鬼足袋（オニタビ）通りを行く

廣瀬　達志

「オニタビ通り」ってご存知ですか？今は「東邦医大通り」と呼ばれている道路のことです。ＪＲ東海道線と国道一五号線の中間を並行して大森と蒲田を南北につなぐ道路です。蒲田駅東口からＪＲ線を左に見ながら大森方面に北上し、右手に東邦医大を過ぎて更に北上すると、内川という川を越え環状7号線と交差します。この内川には富士見橋という橋がかかっていて、橋の北西の角の一街区は大森第八中学校です。

この大森第八中学校の敷地に、戦前、鬼足袋工業株式会社という冬用のコールテン製の足袋の工場がありました。「オニタビ通り」という呼称は、戦前この沿道に有った大規模な建物はこの工場だけだったことで、この道路は自然と人々からこう呼ばれるようになりました。

では、鬼足袋工業とはどんな経緯で大森にやって来たのでしょう。

新素材コール天の輸入と国内生産

明治一九年（一八八六年）頃、通常の木綿生地以外に、コール天と呼ばれる、布の表面が細かくやわらかな繊毛で覆われて手触りがよく、かつ厚手で丈夫な布地も輸入されてきました。この布地は丈夫な上、付加価値があるので値段も通常の布地より高いものでした。明治二三、四年（一九九〇・九一年）の頃、日本でこの輸入布地に目をつけたのは、浅草花川戸の下駄・草履の鼻緒問屋である小林佐吉、平野末吉という人たちでした。

当時は輸入コール天は普通品を「唐天」、高級品を「絹天」と呼称しましたが、当時売出されたのは普通品の「唐天」の鼻緒でした。実際に販売するとコール天の鼻緒は日本人に広く支持されました。

明治二二年（一八八九年）頃から、この特殊な繊維であるコール天生地を国産化できないかと多くの繊維関係の技術者たちが開発研究を開始します。本格的な製品化は明治三二年（一八九九年）頃になりますが、明治二〇年代後半には試作品も含めて「劣品」といわれながらも流通の舞台に登場し始めます。この頃、国産品を目指して先陣を切っていくのが遠州（静岡）の繊維関係者たちです。価格は輸入品が一ヤード四銭に対してこの時期の国産品は一ヤード一銭六厘でした。

ちなみに同系統の布地である別珍（べっちん）の生地開発の研究は明治四〇年（一九〇七年）辺りから始まります。

丸平（マルヘイ）畔柳商店と寺田淳平

明治三〇年（一八九七年）、静岡県福田（ふくで）地区出身の寺田源太郎は東京日本橋の自身が勤める丸平（マルヘイ）畔柳八十次郎商店に、同郷の寺田淳平を誘い入店させます。この誘われた寺田淳平が、数年後に独立するコール天の鬼足袋の創始者です。

明治三二年（一八九九年）５月に寺田源太郎は鼻緒原料問屋として独立し浅草金龍山下瓦町に店を構えます。当時は輸入物や開発されたばかりの国産コール天、その他布地が取扱商品だったと思われます。寺田源太郎はその後明治四〇年（一九〇七年）に浅草花川戸に移り、このとき初めて輸入別珍を手にし、国産別珍の開発製造に全力を注いでいきます。

一方、明治三四年（一九〇一年）には丸平鬼足袋の創始者である寺田淳平も独立し、ほぼ完成に近い国産コール天を使った足袋の製造販売と、その原材料である国産コール天の製造に全力を注ぎ、明治三八年（一九〇五年）からはコール天の「鬼足袋」の商標で一世を風靡していくことになります。

鬼足袋のトレードマークである丸の中に平の字は「マルヘイ」と呼ばれていますが、これは丸平畔柳八十次郎商店の暖簾分けのような意味付けがあったと思われます。

国産コール天と国産別珍との製品化成功には約一〇年のタイムラグがあるといわれています。つまり国産コール天は明治三二年（一八九九年）頃より、国産別珍は明治四二年（一九〇九年）頃より、それぞれテイクオフ（離陸）します。

明治三二年、先に鼻緒原材料販売で独立した寺田源太郎は国産別珍生地の開発に進みますが、製品化される明治四二年（一九〇九年）まで一〇年の歳月があります。

寺田淳平のほうは、独立が国産コール天製品化の成功時期であり、国産コール天布地の製造の本格化と歩調をあわせながら、同時に新製品のコール天足袋の製造販売を進めています。原材料生産とその材料による新製品開発と製造販売という非常に合理的なシステムです。この点では、当時寺田淳平の鬼足袋は時流に乗った電撃的な成功だったといえます。

東京寺田合名会社がコール天足袋「オニタビ」を販売

寺田源太郎、寺田淳平の出身地、静岡県福田（ふくで）地区は天竜川の東岸周辺の地区で平成の自治体合併で磐田市に編入されました。江戸期より遠州では木綿製造を行っており、その延長線上で明治中期に国産コール天の開発を成功させた発祥の地といえます。現在でも国産コール天（コーデュロイ）の九割以上は福田で作られています。

国産コール天の生産は明治三八年（一九〇五年）には静岡県福田地区の独占的産業となり、明治四〇年（一九〇七年）には、畔柳八十次郎、寺田久次郎、高橋長兵衛、寺田淳平の四人の発起人による東三織物が福田に創立されま

す。コール天織機六台、足袋底織機一〇〇台を擁し福田一の大工場になります。

寺田淳平は、静岡で国産コール天製造に関与しつつ、東京に本店（東京寺田合名会社）を置き東京の足袋ブランドとして「鬼足袋（オニタビ）」を売り出していきます。当初、布地生産も縫製も遠州静岡（福田、浜松）ですが、ブランドは東京寺田合名会社からの販売でした。

大森のオニタビ工場稼働

寺田淳平は足袋縫製の生産拠点を静岡ではなく、本社近くの東京に立地させたいという希望があり、ちょうどその頃に大森周辺の耕地整理による開発計画を知ったと思われます。

当時大森は東京のはずれであり、畑と田んぼの田園地帯でしたが、都市の近郊であり、拡大する首都圏周辺の都市化への開発計画がありました。耕地整理によって土地を整備し、道路が建設されて流通の交通も確保できる見込みでした。また、工場に必要な電気供給も、大森周辺は既に明治三四年（一九〇一年）八月二四日から京浜急行電鉄の前身である大師電気鉄道によって地域に電灯用電気が供給されていました。

鬼足袋の設立者寺田淳平は既に明治四三年（一九一〇年）の段階で大森に工場を設立する計画を持っていましたが、耕地整理が終わった末、大正九年（一九三四年）にいよいよ東京近郊に足袋縫製の生産拠点である鬼足袋工場を設置することができました。

ここにいよいよ、機械産業が集積していく大田区にあって、異色といえる繊維産業の立地が成立しました。

大田区の区史編さん専門委員の山本定男さんが二〇〇三年に散逸する工場データをまとめるために出版した「大田区工業のあゆみ」という本があります。主に精密機器や機械産業など重工業系をまとめたもので、軽工業に属する繊維産業の「鬼足袋工業株式会社」には触れられていませんでした。筆者がオニタビを記録しようと考えたのは、この辺の事情もありました。

鬼足袋工業の発展と繊維産業

コール天という柔らかな素材の鼻緒は好評でしたし、今までなかった保温効果のあるコール天足袋は多くのユーザーから支持され、飛ぶように売れました。一躍一流企業の地位を占めた「鬼足袋」でしたが、問題もありました。「足袋」というものは日本人だけが使う商品であり、市場は日本人だけに限定されています。朝鮮や「満州」に移住した日本人が利用したとしても限られていますし、他民族には無縁の商品です。コール天によるズボン（ニッカボッカ）や子供服などの製品開発も進め一定の効果はありましたが、商品が一巡すると買い替えにしか需要は生まれません。そして、そんな中で関東大震災とその後の不況に遭遇

します。

関東大震災と寺田合名会社の消滅

大正一二年九月一日の関東大震災は東京の産業に大きなダメージを与えます。

当時の日本橋区一帯は大きな火の海にのまれ、日本橋大伝馬町にあった寺田合名会社の本社も消失します。震災被害と不況が重なり会社経営も大変だったようです。

大正一三年の後半に、寺田合名会社の名前が消え、今までの業務は鬼足袋工業株式会社が全面的に引き継ぐことになります。震災被害から無事だった大森工場に本社機能の一部を移して営業を続けました。震災から三年後、鬼足袋工業株式会社は大正一五年一一月二二日に日本橋本石町電車通りに新社屋ビルを完成させ、不況の中、宣伝や営業による国内需要の喚起に努力を続けていきます。

国際環境の変化と時代の圧力

新社屋完成から昭和初期の一〇年間ぐらいがオニタビの最も輝いていた時期でした。コールテン生地の染色、海外市場への展開、家具や建材へのコールテンの転用など、有能な人材が育ちそれぞれが関連する分野を開拓し、この会社から巣立っていきました。

昭和に入り、新体制で事業を進める鬼足袋工業株式会社ですが、徐々に国際環境の変化と時代の圧力が重くのしかかってきます。

昭和四年（一九二九年）の世界恐慌後の世界は、各国ともに、信用不安の中で相互に警戒し合い、それぞれが保護貿易に傾斜していきます。自国経済の防衛のため昭和七年（一九三二年）には英国が世界規模のポンド通貨ブロックを形成しますが、一九三六年には日本を除いて英、仏、米で通貨協定を結び対立を緩和させます。日本だけが日満（日本「満洲」中国）ブロックで取り残され、やがて日満支（日本「満洲」中国）ブロックに傾斜していきます。

欧米諸国にとっては、大正期に経済的離陸を経て、国際市場で新たに競争力を持った日本は目障りな存在でした。昭和六年（一九三一年）の「満州事変」で欧米諸国は、警戒心をより一層強め、対日経済制裁で日本の国力増強を牽制する動きがより活発になりました。

昭和八年（一九三三年）日印通商条約が破棄され、オランダによる植民地インドネシアへの日貨輸入規制と続き、昭和九年（一九三四年）の英国及び英領向けの日本製綿布・人絹輸入制限、昭和一〇年（一九三五年）には米領フィリピンでも同様の動きとなります。

昭和一二年（一九三七年）七月の盧溝橋事件を発端とする日中全面戦争は決定的であり、昭和一四年（一九三九年）日米通商航海条約そのものが廃棄されます。日本は綿花輸入、繊維輸出の規制だけでなく、ガソリン、くず鉄、鉄鉱石、銑鉄、銅、ニッケル、ラジウム、ウラニウムの輸入も

禁止される状況に陥りました。加工貿易立国の日本は様々な資源の調達が困難となります。

次第に圧力がかかる日本の交易関係の中で、日本は昭和一三年（一九三八年）に国家総動員法が制定され、同年九月綿の統制実施を行います。物資動員計画では、軍需、官需、輸出需要、民需と区別され、軍需が最優先となります。輸出品を除き、綿の内需の大半は製造販売の禁止を余儀なくされるに至ります。

逼迫した国内の繊維供給に対して、政府は昭和一二年（一九三七年）にスフ（ステイープル・ファイバー）というクズ繊維を合成した粗悪繊維を奨励し始めます。戦局が厳しくなるにつれ国内の繊維機械類もスフ製造のために供出させられていきます。

軍需工場への道

綿花統制で原材料調達も危うくなった鬼足袋工業は軍装品に生産を向けていくしかありませんでした。こうして、昭和二〇年（一九四五年）の敗戦まで鬼足袋工業は軍指定工場となり、日本兵の衣類等を製造していきますが、昭和二〇年の米国B二九の空爆で工場が壊滅します。終戦間際は労働力を学生の勤労動員で補充していたオニタビは労働力もなく、生産設備も灰塵と化し、復興もないまま終戦を境に土地を手放して静かに消えていきました。

注：なお、「地域研究：鬼足袋通りを行く」の本編は「大田区立郷土博物館「紀要」第二〇号　平成二五（二〇一三）年度」に収録されています。図書館等でご覧ください。

全国小売店に配ったホーロー看板　径４５ｃｍ・両面看板
大田区立郷土博物館所蔵